

『後漢書』列伝六十二 董卓伝を題材に、訓読の練習。

あたまのなかで訓読して、吉川忠夫氏の訓読と比べ、気づいたことを記録。

董卓、字は仲穎、隴西臨洮の人なり。性は麤猛そもうにして謀有り。少くして嘗つて羌中に遊び、尽く豪帥と相ひ結ぶ。

後に帰りて野に耕やすに、諸々の豪帥 来りて之に従ふ者有り。卓為に耕牛を殺し、与に共に宴樂(2)す。豪帥 其の意に感じ、帰りて相ひ斂せきめて雑畜千餘頭を得て以て之に遺おくる。是に由りて健俠を以て名を知らる。州の兵馬掾と為り、常に徼めくりて塞下を守る。卓膂力は人に過り、兩韉まさを双帯して、左右に馳射し、羌胡の畏るる所と為る。

桓帝の末、六郡の良家の子なるを以て羽林郎と為る。中郎將の張奐に従ひて軍司馬と為り、共に漢陽の叛羌を撃ちて之を破る。郎中を拜し、縑きぬ九千匹を賜はる。卓曰く、「為す者は則ち己れなるも、有する者は則ち士なり(3)」と。乃ち悉く吏兵に分ち与へ、留むる所無し。稍ようやく西域戊己校尉に遷るも、事に坐して免ぜらる。後に并州刺史・河東太守と為る。

中平元年、東中郎將を拜し、持節して、盧植に代りて張角を下曲陽に撃つも、軍敗れて罪に抵てらる(5)。其の冬、北地の先零羌 及び枹罕・河関の群盜 反叛し、遂に共に湟中の義従胡の北宮伯玉・李文侯を立てて將軍と為し、護羌校尉の冷微を殺す。伯玉ら乃ち劫をどして金城の人なる辺章・韓遂を致まねきて(6)、専ら軍政に任ぜしめ(7)、共に金城太守の陳懿を殺し、攻めて州郡を焼く。

明年の春、数万騎を將ゐて入りて參輔(8)に寇し、侵して園陵に逼り、宦官を誅せんことに托して名と為す。詔して卓を以て中郎將と為し、左車騎將軍の皇甫嵩

(1) 「かつて」の送り仮名が、「嘗て」でなく「嘗つて」だった。

(2) 「与共」は、「ともにともに」と重なるのを恐れない。

(3) 注に、「功を為す者は己れなりと雖も、共に有する者は乃ち士なり」とある。吉川が「なるも」と逆接で訓読できたのは、注を参照したからか。

(4) 「分与す」という、日本語にない語彙は使わない。

(5) 「抵罪」は、受け身で読む。

(6) 「劫(をど)」して「致(まね)」くとは、読むのがむずかしい。

(7) 「専任軍政：攻焼州郡」を、吉川は、「専ら軍政に任せしめ……攻めて州郡を焼く」とする。「軍政を専任せしめ：州郡を攻焼す(≡攻め焼く)」と読めなくもない。訓読による目の往復を減らすように配慮するのが、すぐれた返り点の付け方か。

(8) 「入寇參輔」を、「參輔に入寇し」とはしない。

に副として<sup>(1)</sup>之を征せしむ。嵩功無きを以て免じ<sup>(2)</sup>帰り、而して辺章・韓遂ら大いに盛んなり。朝廷復た司空の張温を以て車騎將軍と為して節を假し、執金吾の袁滂をして副と為し、卓を破虜將軍に<sup>(3)</sup>拜し、盪寇將軍の周慎と並び<sup>(4)</sup>に温に統べしむ。諸郡の兵歩騎合せて十餘万を并せて、美陽に屯して、以て園陵を衛る。章・遂亦た兵を美陽に進む。温・卓与に戦ふ<sup>(5)</sup>も、輒ち利あらず。十一月、夜流星有りて火の如く、光りの長さは十餘丈、章・遂の營中を照し、驢馬 尽く鳴く。賊以て不祥と<sup>(6)</sup>為し、金城に帰らんと欲す。卓之を聞きて喜び、明日、乃ち右扶風鮑鴻らと与に兵を并せて俱に攻め、大いに之を破る<sup>(7)</sup>。首を斬ること数千級。

章・遂敗れて榆中に走り、<sup>(8)</sup>温乃ち周慎を遣はして参万人を將ゐて追ひて之を討たしむ。温の参軍事たる孫堅 慎に説きて曰く、「賊は城中に穀無く、当に外より糧食を<sup>(9)</sup>転ぶべし。堅願はくは万人を得て其の運道を断たん。將軍大兵を以て後に継がば、賊必ず困乏して敢へて戦はざらん。若し走れて<sup>(10)</sup>羌中に入らば、力を并せて之を討たん。則ち涼州 定む可きなり」と。

慎従はず、軍を引ききて榆中城を囲む。而して章・遂は分れて葵園狭に屯し、反りて慎の運道を断つ。慎懼れ、乃ち車重を棄てて退く。

温時に亦た卓をして兵三万を將ゐて先零羌を討たしむるも、卓望垣北に於いて羌胡の囲む所と為り、糧食乏絶し、進退逼急す。乃ち度る所の水中に於いて偽りて堰を立てて、以て魚を捕ふと<sup>(11)</sup>為し、而して潜かに堰の下より軍を過す。賊之を追ふに<sup>(12)</sup>比びて、水を決して已に深く、度ることを得ず。時に衆軍敗退し、唯だ卓のみ師を全くして還り、扶風に屯し、檿郷侯に封ぜられ、邑は千戸。

(中平) 三年春、使者を遣はして持節して長安に就きて張温を<sup>(13)</sup>拜して太尉と為

(1) 「…に副とす」という動詞がある。

(2) この「免ず」は受け身になっていない。一文のなかで、受け身にできるのは最後の一回だから、それ以外は連用形のまま浮いてしまう。

(3) (人名)を(官職)に拜す、という表現がある。

(4) 「並」を「ならびに」と、副詞に読んでよい。

(5) 「不利」は「利あらず」

(6) 「以為不祥」は、「おもへらく不祥たり」、「不祥たるを以て」など、ほかに訓読の方法がありそう。

(7) 「之を大破す」としないのも、視線の往復を減らすためか。

(8) 吉川は、「榆中に敗走し」ともしない。

(9) 「從」を「より」とする。吉川は漢字にするが、かなに開いた。

(10) ここは音便「全う」としない。

す。<sup>(1)</sup>三公の外に在ること、之を温より始む。

其の冬、温を徵して京師に還す。韓遂乃ち辺章及び伯玉・文侯を殺し、兵十餘万を擁して、進みて隴西を囲む。太守の李相如反し、遂と連和し、共に涼州刺史の耿鄙を殺す。而して鄙の司馬たる扶風の馬騰、亦た兵を擁して反叛し、又た漢陽の王国は自ら合衆將軍を号し、皆な韓遂と合す。共に王国を推して主と為し、悉く其の衆を領せしめ、三輔を寇掠す。

五年、陳倉を囲む。乃ち卓を前將軍に拜し、左將軍の皇甫嵩と与に撃ちて之を破る。<sup>(2)</sup>韓遂ら復た共に王国を廢し、而して故の信都令たる漢陽の閻忠を劫し、諸部を督統せしむ。忠為衆の脅す所と為るを恥とし、<sup>(3)</sup>恚りに感じて病みて死す。遂ら稍く権利を争ひ、<sup>(3)</sup>更も相ひ殺害し、其の諸々の部曲並びに各々分れ乖く。

(中平)六年、卓を徵して少府と為すも、就くことを肯ぜず、上書して言はく、「將ゐる所の湟中義従及び秦胡の兵皆な臣に詣りて曰く、『牢直畢らず、稟賜断絶し、妻子飢凍す』と。臣の車を牽挽し、行くことを得ざらしむ。羌胡は敝腸狗態、臣禁止すること能はず、輒ち將順して安慰す。異を増せば復た上らんと。」

朝廷制すること能はず、頗る以て慮れと為す。靈帝疾に寝ぬるに及び、璽書もて卓を拜して并州牧と為し、兵を以て皇甫嵩に属けしむ。卓復た上書して言ひて曰く、「臣は既に老謀無く、又た壮事無きも、天恩誤りて加はり、戎を掌ること十年なり。士卒大小相ひ狎ること弥々久しく、臣の畜養の恩を恋ひ、臣の為に一旦の命を奮はんとす。乞ふらくは將ゐて北州に之き、力を辺垂に効さん」と。是に於いて兵を河東に駐めて、以て時變を觀ふ。

帝の崩ずるに及びて、大將軍の何進・司隸校尉の袁紹闡宦を誅せんことを謀るも、而れども太后許さず。乃ち私かに卓を呼びて兵を將ゐて入朝せしめて、以て太后を脅さんとす。卓召を得るや、即時に道に就く。並ねて上書して曰く、「中常侍の張讓ら倖を窃み寵を承け、海内を濁乱す。臣聞くならく、『湯を揚ぎて沸を止むるよりは、薪を去るに若くは莫し。癰を潰すは痛しと雖も、内に食むに勝る』と。昔趙鞅は晋陽の甲を興して、以て君側の悪人を逐へり。今、臣は輒ち鍾鼓を鳴して洛陽に如く。請ふらくは讓らを収へて、以て姦穢を

(1)むりに使役に読まなくていいらしい。

(2)「之を撃破す」としない、吉川の徹底ぶり。

(3)「病死す」では、まだ訓詁が足りないらしい。

清めん」と。

卓 未だ至らずして、何進 敗る。虎賁中郎將の袁術 乃ち南宮を焼き、宦官を討たんと欲せしも、而れども中常侍の段珪らは少帝及び陳留王を劫して夜に小平津に走る。卓 遠くに火の起るを見て、兵を引き急ぎ進む。未明に城西に到る。少帝の北芒に在るを聞き、因りて往きて奉迎す。

帝 卓の兵を將ゐて卒かに至るを見て、恐怖して涕泣す。卓 与に言ふも、辞もて対ふること能はず。陳留王と語るに、遂に禍乱の事に及ぶ。卓 王を以て賢と為し、且つ董太后の養ふ所為れば、卓 自ら太后と同族なるを以て、廢立せんとの意有り。

初め、卓の入るや、歩騎 三千に過ぎず、自ら兵少なければ、恐らくは遠近の服する所と為らざると嫌ひ、率ね四五日ごとに輒ち夜に潜かに軍を近營に出し、明旦に乃ち大いに旗鼓を陳ねて還り、以て西兵の復た至れりと為す。洛中 知る者無し。尋いで何進及び弟の苗 先に領する所の部曲 皆な卓に帰す。卓 又た呂布をして執金吾の丁原を殺さしめて其の衆を并せ、卓の兵士 大いに盛なり。

乃ち朝廷に諷して司空の劉弘を策免して、自ら之に代はる。因りて廢立を集議す。百僚 大いに会するや、卓 乃ち首を奮って言ひて曰く、

「大なる者は天地、其の次は君臣なり。政を為す所以なり。皇帝 闇弱にして、以て宗廟を奉じて、天下の主と為る可からず。今伊尹・霍光の故事に依りて、更めて陳留王を立てんと欲す。何如」と。

公卿より以下、敢へて対ふるもの莫し。

卓 又た言を抗くして曰く、「昔、霍光 策を定むるや、延年は劍を案ず。敢へて大議を沮むこと有らば、皆な軍法を以て之に従はん」坐する者 震へ動ぐ。

尚書の盧植 独り曰く、「昔、太甲 既に立ちて不明なり。昌邑の罪過 千餘あり。故に廢立の事有り。今上 春秋に富み、行ひに失徳無し。前事の比に非ざるなり」と。

卓 大いに怒り、坐を罷む。

(1) 「与陳留王語」で、「陳留王と語る」となる。

(2) 「……に過ぐ」といつていい。

(3) 注に「抗は高なり」とあるから、この読みになる。

(4) 術語だから、「定策し」としたほうが、いいと思います。

明日、復た群僚を崇徳前殿に集め、遂に太后を脅して、策して少帝を廃す。曰く、「皇帝 喪に在るも、人の子たるの心無く、威儀 人君に類せず。今 廃して弘農王と為す」と。乃ち陳留王を立つ。是れを献帝と為す。又た議すらく、太后は永樂太后を蹙<sup>しゆくはく</sup>迫して、憂死せしむるに至る。婦姑の礼に逆らひ、孝順の節無し。永安宮に遷し、遂に弒<sup>し</sup>を以て崩す<sup>(1)</sup>。

卓 太尉に遷り、前將軍の事を領し、節伝・斧鉞・虎賁を加へ、更めて郿侯に封ぜらる。卓 乃ち司徒の黃琬・司空の楊彪と、俱に鉄鎖を帯びて闕に詣りて上書し、追つて陳蕃・竇武及び諸党人を理して、以て人望に従ふ。是に於て悉く蕃らの爵位を復し、子孫を擢<sup>ぬき</sup>んで用ふ。

尋いで卓を進めて相国と為し、入朝不趨・劍履上殿とす<sup>(2)</sup>。母を封じて池陽君と為し、令・丞を置く。

是の時、洛中の貴戚は室第 相ひ望み、金帛・財産、家家に殷<sup>さか</sup>んに積む。卓 縦<sup>ほしいまま</sup>に兵士を放ち、其の廬舎を突き、婦女を淫略し、資物を剽虜し、之を「搜牢」と謂ふ。人情 崩れ恐れ<sup>(3)</sup>、朝夕を保せず。何后を葬り、文陵を開くに及び、卓 悉く藏中の珍物を取る。又 公主を姦乱し、宮人を妻略し、虐刑・濫罰もて、睚眦も必ず死<sup>ころ</sup>し<sup>(4)</sup>、群僚 内外に能く自ら固むること莫し。

卓 嘗つて軍を遣りて陽城に至らしむ。時に人社下に会す。悉く就<sup>き</sup>きて<sup>(5)</sup>之を斬らしむ。其の車重を駕し、其の婦女を載す。頭を以て車轅に繫<sup>か</sup>け、歌ひ呼<sup>よ</sup>びて還る。又 五銖錢を壞<sup>こぼ</sup>ちて、更めて小錢を鑄す。悉く洛陽及び長安の銅人・鍾虞・飛廉・銅馬の属を取りて、以て鑄に充つ。故に貨は賤<sup>やす</sup>く物は貴く、穀は石ごと<sup>(6)</sup>に数万。又 錢に輪郭・文章無く、人の用に便ならず。時人 以為へらく秦始皇は長人を臨洮に見て、乃ち銅人を鑄す。卓は臨洮の人なり。而して今之を毀つ。成すと毀つ<sup>こぼ</sup>と同じからざると雖も、凶暴なること相ひ類すと。

卓 素より天下 同に閹官の忠良を誅殺せしことを疾<sup>にく</sup>むを聞きたれば、其の事に在るに及びて、無道を行ふと雖も、而れども猶ほ性を忍び情を矯め、群士を擢<sup>ぬき</sup>

(1) 「以弒崩」を、「以て弒崩せしむ」では、日本語になってないか。

(2) 吉川は、「入朝するに趨らず、劍履して殿に上る」とするが、術語を分解してはいけない。

(3) 「崩恐（ホウキョウ）」では、日本語じゃないから、吉川みたいに開くのが正しいんだろう。

(4) ちょっと睚まれたという程度の恨みでも。

(5) 「就きて」は、意味がよく分からないが、吉川も放置する。

んで用ふ。乃ち吏部尚書たる漢陽の周秘、侍中たる汝南の伍瓊、尚書たる鄭公業、長史たる何顥らを任ず。處士たる荀爽を以て司空と為す。其の党錮に染みし陳紀・韓融の徒、皆な列卿と為す。幽滯の士、顯拔する所多し。尚書の韓馥を以て冀州刺史と為し、侍中の劉岱を兗州刺史と為し、陳留の孔伷を豫州刺史と為し、潁川の張咨を南陽太守と為す。卓の親愛する所は、並びに顯職に處らず、但だ將校なるのみ。初平元年、馥らは官に到り、袁紹の徒十餘人と与に、各々義兵を興し、同盟して卓を討つ。而して伍瓊・周秘陰かに内主と為る。

初め靈帝の末、黃巾餘党の郭太ら復た西河の白波谷に起り、転じて太原に寇し、遂に河東を破る。百姓三輔に流転す。号して「白波賊」と為し、衆は十餘万。卓中郎將の牛輔を遣はして之を撃たしむるも、却くること能はず。東方の兵起つと聞くに及び、懼れて乃ち弘農王を鳩殺し、都を長安に徙さんと欲す。公卿を会めて議するや、太尉の黃琬・司徒の楊彪廷争するも得ること能はず、而して伍瓊と周秘又た固く之を諫む。

卓因りて大いに怒りて曰く、「卓初め入朝するや、二子善士を用ひんことを勸む。故に相ひ従ふ。而るに諸君官に到るや、舉兵して相ひ圖る。此の二君卓を賣れり。卓何を<sup>もつ</sup>用てか相ひ負かん」と。遂に瓊と秘を斬る。

而して彪と琬恐懼し、卓に詣りて謝して曰く、「小人舊を恋ふ。国事を沮まんと欲するには非ざるなり。請ふらくは、以て罪と為すに及ばざらんことを」と。卓既に瓊と秘を殺すも、旋ちにして亦た之を悔ゆ。故に彪と琬を表して光祿大夫と為す。是に於いて天子を西の都に遷す。

初め長安赤眉の乱に遭ひ、宮室・營寺焚滅して餘す無し。是の時、唯だ高廟<sup>(4)</sup>と京兆府の舍有るのみにして、遂に便時に幸す。後に未央宮に移る。是に於いて尽く洛陽の人数百万口を長安に徙す。歩騎驅り蹙て、更も相ひ踏藉し、飢餓と寇掠にて、積なれる戸路に盈つ。卓自ら畢圭苑の中に屯留し、悉く宮廟・官府・居家を焼き、二百里の内復た子遺無し。又た呂布をして諸

(1) 会議の場で諫める。

(2) 原文は「伍瓊・周愨」であるが、吉川は「と」を補う。

(3) 吉川は原文にない「と」を補う。「・」を多用すると、原文がスカスカになるから、「と」を使うほうがスマートである。

(4) 「初、」と原文にあつても、日本語なら「、」なしでつなげられる。

(5) 便時とは時日の吉便なるをいう。

(6) 原文の「飢餓寇掠」を、文中の原因のように表記する。

(7) すっきりなにも残らない。

帝の陵及び公卿已下の冢墓を發せしめ、其の珍寶を収む。

時に長沙太守の孫堅も亦た豫州の諸郡の兵を率ゐて卓を討つ。卓先に將の徐榮と李蒙を遣はして四よもに出でて虜掠せしむ。榮堅に梁に遇ひ、与に戦ひて堅を破り、潁川太守の李旻を生禽(1)にして、之を亨にころす。卓は得る所の義兵の士卒をば、皆布を以て纏まとひ裹み、倒さかしまに地に立て、熱き膏あぶらをば灌そそぎて之を殺す。

時に河内太守の王匡兵を河陽津に屯し、將に以て卓を圖らんとす。卓疑兵を遣はして戦ひを挑ましめ、而して潜かに銳卒をして小平津より津北に過わたらしめて之を破る。死者略あつまし尽く。

明年、孫堅は散卒を収合し、進みて梁縣の陽人に屯す。卓將の胡軫と呂布を遣はして之を攻めしむ。布と軫とは相ひ能よからざれば、軍中自ら驚き恐れ、士卒散乱す。堅追ひて之を撃ち、軫と布と敗走す。卓將の李傕を遣はして堅に詣りて和を求めしむるも、堅拒絶して受けず。軍を大谷に進む、洛に距いたるまで九十里。卓自ら出でて堅と諸々の陵墓の間に戦ふも、卓敗走し、却しりぞきて黽池に屯し、兵を陝に聚む。堅洛陽の宣陽城門に進みて、更に呂布を撃つ。布復た破れ走る。堅乃ち宗廟を掃除し、諸陵を平塞し、兵を分けて函谷関より出でしめ、新安・黽池の間に至りて、以て卓の後を截たつ。

卓長史の劉艾に謂ひて曰く、「関東の諸將数々敗る。能く為すこと無きなり。唯だ孫堅の小贇をば、諸々の將軍宜しく之を慎しむべし」乃ち東中郎將の董越をして黽池に屯せしめ、中郎將の段熲をして華陰に屯せしめ、中郎將の牛輔をして安邑に屯せしめ、其餘の中郎將・校尉は布いて諸縣に在つて以て山東を禦ふせぐ。

卓朝廷に諷し、光祿勳の宣璠をして持節して卓を拜して太師と為さしめ、位は諸侯王の上に在り。乃ち引きて長安に還る。百官路に迎へて拜揖す。卓遂に車服を僭擬し、金華青蓋・爪畫兩幡(5)に乗る。時人「竿摩車」と号す。其の服飾天子に近づくを言ふなり。弟の旻を以て左將軍と為し、鄠侯に封ず。兄の子の璜を侍中・中軍校尉と為し、皆な兵事を典つかさどらしむ。是に於いて宗族

- (1) 「生禽にす」という動詞にする。
- (2) ここで返り点を区切るように、「をば」で目的語の節を完結させる。すごい工夫をされたところ。
- (3) 「A与B」の典型的な読み方。
- (4) 「与」がないが、「…と…」で読んでいい。
- (5) 「…なる(車服)」に「という、体言の省略をほのめかす訓読」。

の内外並びに列位に居る。其の子孫鬚鬣に在りと雖も、男は皆侯に封ぜられ、女は邑君と為る。<sup>(1)</sup>

数々百官と与に置酒・宴会し、淫樂すること縦恣たり。乃ち壘を長安城の東に結びて以て自ら居る。又た塢を郿に築く。高さ厚きは七丈、号して「万歳塢」と曰ふ。穀を積んで三十年の儲へを為す。自ら云はく、「事成れば、天下に雄據し、成らざれば、此を守りて以て老を畢ふるに足る」と。

常に郿に至りて塢を行り、公卿より已下横門の外に祖道す。<sup>(2)</sup>卓帳幔を施して飲設し、北地の反者数百人を誘ひ降して、坐中に於いて之を殺す。先づ其の舌を断ち、次に手足を斬り、次に其の眼目を鑿り、鏹を以て之を煮る。未だ死を得るに及ばずして、杯案の間に偃転す。会する者は戦慄し、匕と箸を亡失するも、而れども卓は飲食すること自若たり。諸将言語に蹉跌するもの有れば、便ち前に戮す。又た稍く関中の舊族を誅し、陥るるに叛逆を以てす。

時に太史は氣を望み、当に大臣に戮死する者有るべしと言ふ。卓乃ち使人をして衛尉の張温は袁術と交通すと誣ひせしめ、遂に温を市に笞ちて、之を殺して、以て天変を塞ぐ。前に温の出でて美陽に屯するや、卓をして辺章らと戦はしむるも功無く、温召すも又た時に命に應ぜず、既に到りて辞対不遜なり。時に孫堅温の参軍為りしが、温に勧めて兵を陳ねて之を斬らしめんとす。

温曰く、「卓は威名有れば、方に倚りて以て西に行かん」と。

堅曰く、「明公親ら王師を帥る、威は天下に振ふ。何ぞ卓を待みて之に頼らんや。堅聞くならく、古の名将、鉞を杖きて衆に臨み、未だ断斬して以て威武を示さざる者有らざるなりと。故に穰苴は莊賈を斬り、魏絳は楊干を戮せり。今若し之を縦さば、自ら威重を虧く。後悔するとも何ぞ及ばん」と。

温従ふこと能はざりしも、而れども卓は猶ほ忌恨を懷き、故に難に及ぶ。

(1)「為る」は、受け身にしていない。

(2)見送る。

(3)従属節の主語を示すとき、「は」「の」の使い分けはセンスだな。

(4)ぼくは、「屯するに」とやってしまったが、「Vするや」を使っただけ。

(5)すぐに命令に応じない。

(6)「辞対は不遜なり」とせず、吉川は「辞対不遜なり」とつなげる。人名が主語のときは助詞を補うが、そうでないときは、ズラッとつなげてしまう。半角ぐらい開けたほうが読みやすいのに。

(7)ぼくは、「頼るや」とやりそうになった。

温、字は伯慎、少くして名譽有り。<sup>(1)</sup>累りに公卿に登り、亦た陰かに司徒の王允と共に卓を誅せんことを謀るも、事未だ發するに及ばずして害せらる。越騎校尉たる汝南の伍孚、卓の凶毒なるに忿り、之を手刃せんと志し、乃ち朝服に佩刀を懷にして以て卓に見ゆ。孚語り畢りて辞去するや、卓起ちて送りて闇に至り、手を以て其の背を撫す。孚因りて刀を出して之を刺すも、中らず。卓自ら奮ひて免るることを得、急ぎ左右のものを呼びて執へて之を殺さしむ。而して大いに話つて曰く、「虜、反せんと欲するか」と。孚大言して曰く、「恨むらくは、姦賊を都の市に磔裂して、以て天地に謝するを得ざりしことを」と。言未だ畢らずして斃る。

時に王允は呂布及び僕射の士孫瑞と与に卓を誅せんことを謀る。人有りて「呂」の字を布の上に書き、負ひて市を行り、歌ひて曰く、「布なるか」と。卓に告ぐる者有るも、卓悟らず。

三年四月、帝の疾新たに愈え、大いに未央殿に会す。卓朝服して車に升る。既にして馬驚きて泥に墮ち、還りて更衣に入る。其の少妻之を止むるも、卓從はずして遂に行く。乃ち兵を陳ねて道を夾み、壘より宮に及び、歩を左にし騎を右にし、屯衛周市し、呂布らをして前後を扞ぎ衛らしむ。王允乃ち士孫瑞と与に密かに其の事を表し、瑞をして自ら詔を書して以て布に授く。騎都尉の李肅をして布と与に同心の勇士十餘人と与に、偽りて衛士の服を著け、北掖門の内に於いて以て卓を待つ。

卓將に至らんとして、馬驚きて行かず。怪しみ懼れて還らんと欲す。呂布勸めて進ましめ、遂に門に入る。肅戟を以て之を刺すも、卓は甲を衷にしたれば入らず、臂を傷つけ車より墮つ。顧みて大いに呼んで曰く、「呂布何こ

(1) すなおに、「」を入れてよい。

(2) 「手刃す」という動詞に読んでいる。

(3) 「ふところにす」という動詞で読んでいる。

(4) 読点で、主語を切ってしまうのは、便利だから多用しよう。

(5) ながったらしい返りになりそうなら、「Vすらくは」で、さきに動詞を読んでもおく。

(6) 文頭の「有人」を、「人有りて」と読んで片づけてしまう。

(7) 「布乎」を、「布なるか」とする。

(8) 「左」「右」の文字を、きちんと動詞にひらけ。

(9) 周囲をぐるりと防備して。

(10) 用言の成分が足りないうとき、「於いて」が助けになる。置き字だからといって、消してしまうと、用言が足りなくてぎこちなくなる。

(11) 動詞＋動詞の熟語で、日本語にこなれていなければ、このように開くのがよい。

(12) 衷にす（なかにす）という動詞で読むのは、胡三省の注の助けを受けてのこと。

にか在る」と。布曰く、「詔有りて賊臣を討つ」と。卓大いに罵りて曰く、「庸狗、敢て是の如くするや<sup>(1)</sup>」と。布聲に應じて矛を持ちて卓を刺す。兵を趣<sup>せきた</sup>てて之を斬る。主簿の田儀及び卓の倉頭前<sup>す</sup>んで其の尸に赴くも、布又た之を殺す。馳せて赦書を齎して、以て宮陛に令す。内外の士卒皆な万歳を稱し、百姓道に歌舞す。

長安中の士女、其の珠玉・衣装を賣りて酒肉を市<sup>か</sup>ひて相ひ慶する者、街肆に填ち滿つ<sup>(2)</sup>。皇甫嵩をして卓の弟たる旻を郿塢に攻めしめ、其の母・妻・男・女を殺し、尽く其の族を滅す。乃ち卓を市に尸す。天は時に始めて熱し、卓素より充肥したれば<sup>(3)</sup>、脂は地に流る。尸を守るの吏火を然<sup>も</sup>やして卓の膂中に置くに、光明曙にまで達し<sup>(5)</sup>、是の如きこと日を積<sup>か</sup>ぬ。諸袁の門生は又た董氏の尸を聚め、焚きて灰にして之を路に揚ぐ<sup>(6)</sup>。塢中の珍藏金は二三万斤、銀は八九万斤有り。錦綺・纈縠・紈素・奇玩、積むこと丘山の如し。

初め卓、牛輔を子壻にして、素より親信する所なるを以て、兵を以て陝に屯せしむ。輔其の校尉たる李傕・郭汜・張濟を分遣して、歩騎数万を將ゐて、撃ちて河南尹の朱儁を中牟に破らしむ<sup>(7)</sup>。因つて陳留・潁川の諸縣を掠め、男女を殺略し、過ぐる所復た遺類<sup>(8)</sup>無し。呂布乃ち李肅をして詔命を以て陝に至りて輔らを討たしむ。輔ら逆<sup>むか</sup>へて肅と戦ひ、肅敗れて弘農に走<sup>の</sup>る。布之を誅殺す。其の後、牛輔の営中故無くして大いに驚く。輔懼れ、乃ち金寶を齎して城を踰へて走れんとするも、左右のもの<sup>(9)</sup>其の貨を利とし、輔を斬つて首を長安に送る。

惟と汜ら、王允と呂布は董卓を殺せしを以て、故に并州の人を忿怒し、并州の

(1) 「かくのごとくなる」としてしまったが、文意から、「かくのごとくする」とすべき。

(2) 動詞+動詞をひらいている。

(3) 原因であることを、きつちり明示する訓読。

(4) 原文にとくに「の」がないけれど、「の」がないとリズムが悪い。

(5) 「達曙す」じゃ、意味が分からないから、吉川が開いている。

(6) 「灰にす」という動詞を思いつかないと、こうならない。

(7) 「撃破」というのは、「撃」という行為の結果として、「破」ったという、時間差のある熟語であることが意識されている。

(8) ここは、「遺類するもの無し」ではないのね。

(9) 「左右」だけでは、ひとのことだと分からないから、「のもの」を付ける。

人にして其の軍に在る者 男女数百人をば、<sup>(1)</sup>皆之を誅殺す。  
牛輔 既に敗れ、衆は依る所無く、各々散じ去らんと欲す。催ら恐れ、乃ち先に使を遣りて長安に詣らしめ、赦免を求め乞ふ。王允 以為へらく、一歳にして再び赦す可からずと。之を許さず。催ら益々憂懼を懷き、為す所を知らず。武威の人の賈詡 時に催の軍に在り、之に説きて曰く、「聞くならく、<sup>(2)</sup>長安中にて議して尽く涼州の人を誅せんと欲すと。諸君若し軍を棄すてて單行せば、<sup>(3)</sup>則ち一亭長とて能く君を束らん。如かず、<sup>(4)</sup>相ひ率ゐて西して、以て長安を攻めて、董公の為に仇に報みんには。事濟らば、国家を奉じて以て天下を正さん。若し其れ合はざれば、走れても未だ後からざるなり」と。  
催ら之を然りとし、各々相ひ謂ひて曰く、「京師 我を赦さず。我当に死を以て之を決すべし。若し長安を攻めて剋たば、則ち天下を得ん。剋たざれば、則ち三輔の婦女・財物を鈔め、<sup>(5)</sup>西のかた郷里に帰り、尚ほ命を延ばす可し」と。衆 以て然りと為す。

是に於いて共に盟を結び、軍数千を率ゐて、晨夜 西に行む。<sup>(6)</sup>王允 之を聞き、乃ち卓の故将の胡軫・徐榮を遣はして之を新豊に撃たしむ。榮 戦ひて死し、軫 衆を以て降る。催 道に隨ひて兵を収め、長安に至るに比んで、<sup>(7)</sup>已に十餘万。卓の故の部曲たる樊稠・李蒙らと合し、長安を囲む。城峻くして攻む可からず、<sup>(8)</sup>之を守ること八日。呂布の軍に叟兵の内に反するもの有り、催の衆を引きて入ることを得しむ。城潰え、兵を放ちて虜掠し、死する者万餘人。衛尉の种拂らを殺す。呂布 戦ひて敗れて出でて奔る。<sup>(9)</sup>王允 天子を奉じて宣平城門の樓上に保す。是に於いて天下に大赦す。<sup>(10)</sup>

李催・郭汜・樊稠ら皆 將軍と為る。遂に門樓を囲む。共に表して司徒の王允

(1) 目的語であることを明示する、「をば」は便利だなあ！

(2) はじめに、動詞を読んでしまうのは、返りを単純にするための秘訣。

(3) 《過去の助動詞「き」の未然形+接続助詞「ば」》 現実にとこらなかつたことを仮定的に推量する。もし：たなら。

(4) 「しかず」を先に読んでしまうのも、返りを単純にするコツ。

(5) 数字が末尾にくると、「なり」とか「とす」とか付けずに、体言止めにする。

(6) 「攻むる可からず」ではありません。

(7) この「こと」を補えないから、ぼくはダメなんだ。

(8) 「出奔」すら分解するのが、吉川の訓読。

(9) 「たてまつる」ではなく、「ほうず」で。

(10) 天下「を」大赦するのではない。天下「に」大赦する。

に出でんことを請ひ、「太師に何の罪かある」と問ふ。允窮蹙して乃ち下り、後数日にして見殺。惟ら董卓を郿に葬り、並びに董氏の焚かる所の尸の灰を収め、合せて一棺に斂めて之を葬むる。葬る日、大いに風雨あつて、卓の墓に霆震し、流水は藏に入り、其の棺木を漂はしむ。

惟 又た車騎將軍に遷り、開府し、司隸校尉を領し、仮節とす。汜は後將軍、稠は右將軍、張濟は鎮東將軍と為り、並びに列侯に封ぜらる。惟・汜・稠共に朝政を乗る。濟 出でて弘農に屯す。賈詡を以て左馮翊と為し、之を侯とせんと欲す。詡曰く、「此れ命を救ふの計なり。何の功か之れ有らん」と。固辞して乃ち止む。更めて以て尚書と為して選を典らしむ。

明年夏、大いに雨ふること晝夜二十餘日、人庶を漂没す。又風ふくこと冬の時の如し。帝 御史の裴茂をして詔獄を訊ねしめ、繋がる者二百餘人を原す。其の中に惟の枉げて繋ぐところと為る者有り。惟茂の之を赦さんことを恐れ、乃ち表して奏すらく茂 擅に囚徒を出し、疑ふらくは姦故有れば、請ふ之を収へんと。

詔して曰く、「災異屢々降り、陰雨は害を為す。使者は命を銜みて恩澤を宣布し、輕微を原し解き、庶はくは天心に合はんことを。冤結を釋さんと欲して而して復た之を罪せんや。一切問ふこと勿れ」と。

初め卓の関に入るや、韓遂と馬騰を要へて共に山東を謀らんとす。遂と騰も天下の方に乱るを見て、亦た卓に倚りて兵を起さんと欲す。

興平元年、馬騰 隴右より来朝し、進みて霸橋に屯す。時に騰 私かに惟に求むること有るも、獲られずして怒る。遂に侍中の馬宇・右中郎將の劉範、前の涼

(1) 「罪『かある』」は、訓読するものが補わねばならない。

(2) おいつめられて

(3) 「後数日にして」のリズムを覚える。「後に数日して」ではない。

(4) 原文は、「所焚尸之灰」である。

(5) 「風雨あり」と動詞に読むこと。

(6) 原文「為尚書典選」を、「尚書典選と為す」とするな。

(7) 「表奏」をさきに読んでしまい、返りを単純にする。

(8) 動詞を先頭で読んでしまう、べつのパターン。

(9) ここは「輕微なる(もの)」と、ひとを補わない。

(10) 原文は「遂騰」なのに、「遂と騰も」と、助詞を補いまくる。

(11) 原文にない、可能的助動詞を足している。文意にもとづく。

州刺史种劭・中郎将の杜稟と与に兵を合してこ催を攻む。連日 決せず。韓遂之を聞き、乃ち衆を率ゐて来りて騰と催を和せしめんと欲せしも、既にして復た騰と合す。催 兄の子の利をして郭汜・樊稠と共に騰らと長平觀の下に戦はしむ。遂と騰は敗れ、首を斬ること万餘級。种劭・劉範ら皆な死す。遂と騰は走のがれて涼州に還り、稠ら又た之を追ふ。

韓遂、人をして稠に語らしめて曰く、「天下 反覆して未だ知る可からず。相ともひ与に州里なり。今 小しく違へりと雖も、要するに当に大同すべし。共に一言せんと欲す」と。

乃ち馬を駢ならべ臂うでを交へて相ひ加へ、笑語すること良やや久し。軍 還るや、利催に告げて曰く、「樊と韓は馬を駢べて笑語す。其の辞を知らざるも、而れども意愛 甚だ密なり」と。

是に於いて、催と稠 始めて相ひ猜疑するも、猶ほ稠及び郭汜に開府を加へ、三公と合して六府と為し、皆な選舉に参ぜしむ。

時に長安中の盜賊 禁ぜず、白日に虜掠す。催・汜・稠乃ち城内を参分して、各々其の界に備ふるも、猶ほ制すること能はず。而も其の子弟 縦横して、百姓を侵暴す。是の時、穀一斛ごとに五十万、豆麥は二十万、人は相ひ食らひ啖はみ、白骨は委積して、臭穢は路に滿つ。

帝 侍御史の侯汶をして太倉の米豆を出して飢人の為に糜かゆを作らしむも、日を経て死者 限り無し。帝 賦卹に虚有らんと疑ひ、乃ち親ら御前に於いて自ら臨檢を加ふ。既に實ならざるを知り、侍中の劉艾をして出でて有司を讓めしむ。是に於いて尚書令より以下 皆な省閣に詣りて謝わび、侯汶を収へて考實せんことを奏す。

詔して曰く、「未だ汶を理に致すに忍びず。杖五十なる可し」と。是より後、多く全濟することを得たり。

明年春、催 会に因つて樊稠を坐に刺殺す。是れに由つて諸将 各々相ひ疑異す。催と汜は遂に復た兵を理めて相ひ攻む。安西將軍の楊定なる者は、故は卓の部曲将なり。催の忍害せんことを懼れ、乃ち汜と謀を合して天子を迎へて其の營に幸せしめんとす。催 其の計を知り、即ち兄の子の暹をして数千人を將ゐて

(1) 「ともに州里なり」で、同郷人であると。

(2) 「不実を知り」よりも、「実ならざるを知り」がよい。

(3) 「理に致す」とは、処刑すること。

(4) 多くのものが、生き延びることができた。

宮を囲ましむ。車三乗を以て天子と皇后を迎へんとす。

太尉の楊彪 暹に謂ひて曰く、「古今の帝王、人臣の家に在る者無し。諸君事を擧ぐる**こと**、当に上は天心に順ふべし。奈何 是の如くす」と。暹曰く、「將軍の計 決せり」と。帝 是に於いて、遂に催の營に幸し、彪ら皆な徒**にて**従ふ。

乱兵 殿に入りて、官人の什物を**掠め**、催 又た御府の金帛・乗輿・器服を徙し、而して火を放ちて宮殿・官府を焼き、居人悉く**尽く**。帝 楊彪と司空の張喜ら十餘人と与に催と汜を和せしめんとせしも、汜 従はず。遂に質として公卿を留む。彪 汜に謂ひて曰く、「將軍は人間の事に達す。奈何ぞ君臣 分争し、一人は天子を劫し、一人は公卿を質とするや。此れ行ふ可きや」と。

汜 怒り、彪を手刃せんと欲す。彪曰く、「卿 尚ほ国家をすら奉ぜず。吾豈に生を求めんや」と。

左右 多く諫め、汜 乃ち止む。遂に兵を引きて催を攻む。矢は帝の前に及び、又催の耳を貫く。催の將たる楊奉は本と白波の賊帥なり。乃ち兵を將みて催を救ふ。是に於て汜の衆 乃ち退く。

是の日、催 復た帝を移して其の北の塙とりでに幸せしめ、唯だ皇后と宋貴人のみ俱なり。催 校尉をして門を監せしめ、内外を隔絶す。尋いで復た帝を池陽の黄白城に徙さんと欲す。君臣 惶懼す。司徒の趙温 深く之を解譬し、乃ち止む。詔して謁者僕射の皇甫酈を遣はして催と汜を和せしむ。酈 先に汜を譬し、汜即ち命に従ふ。

又た催に詣るに、催 聽かずして曰く、「郭多、馬を盗める虜なるのみ。何ぞ敢へて我と同じくせんと欲するや邪。必ず之を誅せん。君 我が方略の士衆を觀て、郭多を辨するに足るや不やを。多 又た劫して公卿を質とす。為す所是の如し。而るに君は苟めに之を左右けん(6)と欲するや」と。汜の一名は多なり。

酈曰く、「今 汜は公卿を質とし、而して將軍は主を脅す。誰ぞ輕重あらんや」と。

(1) 「として」なんて、訓読で補っていいんだなあ！

(2) 「手刃す」という、ふしぎな動詞がある。

(3) 「なほ……をすら」と呼応している。原文にない「すら」が登場。

(4) 説得して。

(5) 「誅さん」ではない。未然形は「誅せ…」である。

(6) 注釈に「左右」とは「助」なり、とあるらしい。

権は怒り、呵<sup>しか</sup>つて酈を遣り、因つて虎賁の王昌をして追ひて之を殺さしむ。<sup>(1)</sup>  
昌偽つて及ばざるまねし<sup>(2)</sup>、酈以て免るることを得たり。権乃ち自ら大司馬と為る。郭汜と相ひ攻むること連月、死者は万を以て数ふ。

張濟 陝より来りて二人を和解せしむ。仍<sup>な</sup>ほ帝を遷して権<sup>か</sup>りに弘農に幸せしめんと欲す。帝亦た舊京を思<sup>した</sup>ひたれば、因つて使を遣はして敦く権に請ひて東に帰らんことを求ふ。十反にして乃ち許す。車駕即日<sup>ゆ</sup>に發し邁<sup>ゆ</sup>く。李傕出でて曹陽に屯す。

張濟を以て驃騎將軍と為し、復た還りて陝に屯せしむ。郭汜を車騎將軍、楊定を後將軍、楊奉を興義將軍に遷す。又た故の牛輔の部曲たる董承を以て安集將軍と為す。汜ら並びに侍して乘輿を送る。汜遂に復た帝を脅して郿に幸せしめんと欲せしも、定・奉・承聽<sup>ゆ</sup>さず。汜變の生ぜんことを恐れ、乃ち軍を棄てて還りて李傕に就く。

車駕進みて華陰に至る。寧輯將軍の段熲乃ち服御及び公卿より以下の資儲を具<sup>そな</sup>へ、帝の其の宮に幸せんことを請ふ。初め楊定熲と隙有り。遂に熲は反せんと欲すと誣<sup>そな</sup>し、乃ち其の宮を攻むるも、十餘日下らず。而れども熲は猶ほ御膳を奉給し、百官に稟贍し、終<sup>あ</sup>くまで二<sup>ふた</sup>意無<sup>し</sup>し。

李傕と郭汜 既に天子をして東せしめしことを悔い、乃ち来りて段熲を救ひ、因つて帝を劫して西せしめんと欲す。楊定汜の遮る所と為り、亡<sup>の</sup>れて荊州に奔る。而して張濟は楊奉・董承と与に相ひ平らかならざれば、乃ち反して権・汜と合し、共に乘輿を追ふ。大いに弘農の東澗に戦ふ。

承と奉は軍敗れ、百官・士卒の死する者勝げて数ふ可からず。皆な其の婦女・輜重を棄て、御物・符策・典籍、略<sup>あらま</sup>し遺す所無し。射聲校尉の沮儁創<sup>う</sup>を被け馬より墜つ。李傕左右に謂ひて曰く、「尚ほ活かす可きや不<sup>いな</sup>や」と。儁之を罵りて曰く、「汝ら凶逆にして、天子を逼迫す。乱臣・賊子、未だ汝の如き者有らず」と。権之を殺さしむ。

天子遂に曹陽に露次す。承と奉乃ち権らを譎<sup>あざむ</sup>きて与に連和し、而して密かに間使を遣はして河東に至らしめ、故の白波帥の李樂・韓暹・胡才及び南匈奴の右賢王の去卑を招く。並びに其の衆数千騎を率ゐて来り、承・奉と共に権らを撃ち、大いに之を破り、首を斬ること数千級。乘輿乃ち進むことを得たり。

(1) 「殺せしむ」ではなく、「殺さしむ」が正しい。サ変じやない。

(2) 「偽つて……まねし」なんて、高度すぎて、マネできない。

董承・李樂 左右に擁衛し、胡才・楊奉・韓暹・去卑 後の**距ぎ**為る。惟ら復た来りて戦ひ、奉ら大いに敗れ、死者 東澗**よりも甚だし**。<sup>(1)</sup> 東澗より兵 相ひ連綴すること四十里中にして、方に陝に至るを得て、乃ち營を結びて自ら守る。

時に殘破の餘、虎賁・羽林は百人に満たずして、皆な離心有り。承・奉ら夜に乃ち潜かに河を過らんことを議す。李樂をして先づ度りて舟舡を具へ、火を擧げて應を為さしむ。帝 歩きて營を出で、河に臨いて濟らんと欲せしも、岸の高さは十餘丈、乃ち絹を以て**縋り**て下る。餘人 或いは岸側に匍匐し、或いは上より自ら投じ、死亡・傷殘して、復た相ひ知らず。

争ひて舡に赴く者、禁制す可からず。董承 戈を以て撃ちて之を**披ひ**、手指を舟中に断つ者 **擲す**可し。同に濟るは、唯だ皇后・宋貴人・楊彪・董承及び后父の執金吾たる伏完ら數十人のみ。其の宮女 皆 催の兵の掠奪する所と為り、凍えて溺死する者 甚だ衆し。既に大陽に到るや、人家に止まる。然る後、李樂の營に幸す。百官 飢餓す。

河内太守の張楊 数千人をして米を負ひて貢餉せしむ。帝 乃ち牛車を御し、因つて安邑に都す。河東太守の王邑 綿帛を奉獻し、悉く公卿より以下に**賦つ**。邑を封じて列侯と為す。胡才を征東將軍に**拜し**、張楊を安國將軍と為す。皆 飯節・開府とす。其の壘壁の群豎、競ひて職に**拜せられん**ことを求め、刻印 **給**らざれば、乃ち錐を以て之を**画する**に至る。或いは酒肉を齎らして天子に就きて燕飲す。又た太僕の韓融を遣はして弘農に至らしめ、催・汜らと連和す。催 乃ち公卿百官を**放ち遣り**、**頗**か宮人・婦女及び乘輿・器服を帰す。

初め帝の関に入るや、三輔の戸口 尚ほ数十万なりしも、催・汜の相ひ攻め、天子 東帰**せし**後より、長安城は空しきこと四十餘日、強き者は四散し、羸よわ者は相ひ食み、二・三年の間、関中 **復**や人跡無し。

建安元年春、諸將 権を争ひ、韓暹 遂に董承を攻め、承 張楊に奔る。楊 乃ち承をして先づ洛宮を繕修せしむ。

七月、帝 還りて洛陽に至り、楊安殿に幸す。張楊 以て己の功と**為し**、故に因つて「楊」を以て殿に名づく。乃ち諸將に謂ひて曰く、「天子 当に天下と与に之を共にすべし。朝廷 自ら公卿・大臣有り。楊は当に出でて外難を**扞**ぐべし。何ぞ京師を**事**と**せん**」と。遂に野王に還る。

楊奉も亦た出でて梁に屯す。乃ち張楊を以て大司馬と為し、楊奉を車騎將軍と

(1) 「…に甚だし」じゃあ、意味がわからない。比較表現と気づけ。

為し、韓暹を大將軍と為して司隸校尉を領せしむ。皆節鉞を仮す。暹は董承と与に並びに留まりて宿衛す。

暹功を矜りて恣睢、政事を干し乱す。董承之を患へ、潜かに兗州牧の曹操を召す。操乃ち闕に詣りて貢獻し、公卿より以下に稟す。因つて韓暹・張楊の罪を奏す。暹は誅せられんことを懼れ、單騎にて楊奉に奔る。

帝暹・楊に車駕を翼けしの功有るを以て、詔して一切問ふこと勿かれと。是に於いて衛將軍の董承・輔國將軍の伏完ら十餘人を封じて列侯と為し、沮儁に贈りて弘農太守と為す。

曹操洛陽の殘荒せるを以て、遂に帝を移して許に幸せしむ。楊奉・韓暹車駕を要へ遮らんと欲せしも、及ばず。曹操之を撃つ。奉・暹袁術に奔り、遂に暴を楊・徐の間を縦にす。① 明年、左將軍の劉備は奉を誘ひて之を斬る。

暹は懼れ、走れて并州に還らんとするも、道にて人の殺す所と為る。胡才と李樂は河東に留まる。才は怨家の害する所と為り、樂は自ら病みて死す。張濟は飢餓し、出でて南陽に至り、穰を攻めて戦ひて死す。郭汜其の將たる伍習の殺す所と為る。

三年、謁者僕射の裴茂をして関中の諸將たる段熲らに詔して李傕を討たしめ、三族を夷ぐ。段熲を以て安南將軍と為し、閬郷侯に封ず。

四年、張楊、其の將たる楊醜の殺す所と為る。董承を以て車騎將軍と為し、開府せしむ。

許に都してよりの後、② 権は曹氏に帰し、天子は己を總べ、百官は員に備はるのみ。帝操の専偏を忌み、乃ち密かに董承に詔して、天下の義士を結びて共に之を誅せしめんとす。承遂に劉備と共に謀る。未だ發せずして、③ 会ま備出征し、承更めて偏將軍の王服・長水校尉の种輯、議郎の呉碩と与に謀を結ぶ。事泄れ、承・服・輯・碩皆な操の誅する所と為る。

韓遂と馬騰は涼州に還りてより、④ 更も相ひ戦ひ争ひ、乃ち隴を下りて関中に據る。操方に河北を事としたれば、其の間に乘じて乱を為さんことを慮れ、

(1) 原文は「縦暴揚徐間」である。かわった読み方！

(2) 原文「自都許之後」である。ふしぎなかんじ。

(3) 「自還」は、「みずからかへり」ではない。「かへりてより」である。

七年、乃ち騰を征南將軍、遂を征西將軍に拜し、並びに開府せしむ。後に段熲を徵して大鴻臚と為すも、病みて卒す。

復た馬騰を徵して衛尉と為し、槐里侯に封ず。騰乃ち召に應じ、而して子の超を留めて其の部曲を領せしむ。

十六年、超韓遂と与に関中を擧げて曹操に背く。操撃ちて之を破る。遂と超は敗れ走れ、騰は坐して三族を夷たいらげらる。超攻めて涼州刺史の韋康を殺し、復た隴右に據る。

十九年、天水の人の楊阜超を破り、超漢中に奔りて、劉備に降る。韓遂金城の羌中に走れ、其の帳下の殺す所と為る。初め隴西の人の宗建枹罕(1)に在り、自ら「河首平漢王」を稱し、百官を署置すること三十年許り。曹操因つて夏侯淵を遣りて建を撃たしめ、之を斬る。涼州悉く平らぐ。150414

(1)原文は「三十許年」。へんなレ点であることだ。